

# 新学習指導要領に向けての授業実践

— 他者の言葉とのかかわり合いをとおして、言葉の世界をひらく国語科の学習 —

山元 隆春 佐々木 勇 田中 宏幸 杉川 千草  
加藤 秀雄 八澤 聡 實谷 富美

## 1. はじめに

本校では、これまでに小中一貫教育における国語科の総合単元の開発をめざし、カリキュラムや教材作り、指導法の改善などに取り組んできた。

昨年度までの研究では、学習者どうしが言葉による新たな関係を築いていくことや教室外の新たな他者との出会いなど、言葉をとおしたコミュニケーションを扱いながら協同的な学びをつくり出していく姿を探ってきた。また、教材として多様な他者を教材として設定し、授業構成を工夫していく中で、言葉をとおしてかかわり合い自分の考えの広がりや深まりを確かめたり、その意義を大切にしたりすることができるようになってきた。

そこで本年度は、新学習指導要領の実施を踏まえて言語活動の充実を意識し、国語科の学習の中に意図的、計画的に言葉を通したかかわり合いの場を設定することによって、思考力、判断力、表現力を育み、新たな認識を広げて「言葉の世界をひらく」国語科の学習について探っていくこととした。

## 2. 研究の構想

### (1) 研究の目的

本研究は、学習者が自分のまわりの他者と出会うかかわり合うことをとおして、自分自身の言葉の世界を広げ、学びを探究していくことができるようにするための効果的な指導法を開発していくことを目的としている。

この研究の方向は、新学習指導要領に示されている、実生活で生きて働く国語の能力を調和的に育てることをめざし、児童主体の言語活動を活発にしていく中で国語科の目標を確実に豊かに実現できるようにすることと合致するものである。

他者とのかかわり合いをとおして、自分の思いを表

現し、知識をもとにした的確な判断を行う学習を積み重ねることで、今後子どもたちがさまざまな場面で活躍していくための力を育んでいくことになる。さらに、学びを実生活や社会の中に生かしていくことで他者とのよりよい関係を築いていくことにつながると考える。

### (2) 研究の方法

本研究では、小学4年生と小学6年生を取りあげて考察する。ここでは「言葉の世界をひらく」学習を行うために、以下の5点に留意して単元構成を行った。

- ・言葉を学ぶ意欲の喚起
- ・多様な他者との出会い
- ・コミュニケーションを大事にした協同的な学び
- ・認識の広がりや深まりを実感させる場の設定
- ・表現を磨き合う場の設定

### (3) 検証の方法

検証の材料として、子どもの学習記録や作品、授業記録などをもとにして考察を行う。

## 3. 実践1—4年「くらしを見つめて」

(「手で食べる，はしで食べる」森枝 卓士)－  
学校図書4年下

### (1) 授業の構想

#### ①単元について

本単元は、「手で食べる，はしで食べる」という異文化についての説明文を読み取ったことをもとに、それぞれ文化の違いについての調べ学習の発表に発展させようとするものである。この文章においては、米の種類や食に対する考え方など、その国に生きる人々の知恵である文化の違いをもとに、手で食べることで箸で食べることの違いが平易な言葉で述べられている。ここでは、段落ごとの要点をまとめたり段落相互の関係を読み取ったりするとともに、調べ学習の発表を通

して、文化についての自分の考えを深めさせることをねらいとした。

指導にあたっては、課題意識を持たせ、筆者との対話を大切にさせることによって、自分の考えの深まりを確かめながら説明文を読むことができるようにした。また、それぞれの読みを交流させることによって、内容とともに段落相互の関係や筆者の述べ方の工夫を読み取らせた。調べ学習の段階では、グループでの交流を取り入れることによって、自分の調べたいことを明確にさせ、より効果的なまとめ方を工夫させた。さらに、留学生との交流を位置づけることによって、本文に書かれている内容について吟味させたりより深く考えさせたりすることにつなげるようにした。

## ②目標

- 細かい点に注意しながら、段落相互の関係を読み取り、段落ごとに書かれていることの要点をまとめることができるようにする。
- 調べたことや自分の考えを相手に伝わるように筋道を立てて話したり、疑問点を質問したり感想をまとめたりすることができるようにする。
- 他者の言葉とのかかわり合いをとおして、それぞれの国の文化について自分の考えを深めていくことができるようにする。

## ③学習計画（全18時間）

- 第1次 「手で食べる、はしで食べる」を読もう  
…………… 2時間
- 第2次 学習計画を立てよう…………… 1時間
- 第3次 内容や筆者の工夫を読み取ろう  
…………… 6時間
- 第4次 文化のちがいを調べて発表しよう  
…………… 7時間
- 第5次 発表会をしよう…………… 2時間

### (2) 授業の実際（N児の記録を中心に）

〈第1次 「手で食べる、はしで食べる」を読もう〉

まず、子どもたち一人ひとりに、どんなものをどのような方法で食べているかを意識させるために、授業日の朝か前日の夜の食事を絵に描かせた。次に、「食べもの記」（森枝卓士）の中にある、カレーを手で食べている写真を提示し、このような食べ方についてどう思うか、自由に出させた。

べちゃべちゃしないのか、気色悪くないのか不思議だし、ぎょうぎが悪いし、ごうかいだと思いました。すごいどきょうだと思いました。なぜスプーンじゃないのか不思議です。

その後、自分が絵に描いた食事はどんな道具を使っ

て食べたかを記入させ、なぜそのような方法で食べたのかを改めて考えさせた。

ご飯を手でつかむとねちゃねちゃして、手にくっつき、食べやすいから。トマトやみかんを手でつかんで食べるのは、手にくっつかないから。日本のじょうしきだから。

次の時間に、本文を読み、感想とともに、みんなで学習したいことなどを書かせた。

私は、インドのご飯がさらさらしているのを初めて知りました。おにぎりが作れないんじゃないかなと思いました。また、なぜかん国のはしが金ぞくになったのか、すごく不思議になりました。モンゴルのナイフはカッコいいと思いますが、ナイフはどこの国から来たのか不思議です。

〈第2次 学習計画を立てよう〉

全体では「なぜ手で食べるかはしで食べるかで分かれたか考えよう。」「筆者が伝えたいことを読み取ろう。」「筆者の工夫を見つけよう。」という学習課題について学習することにした。また、形式段落①から⑯までを三つの意味段落に分け、内容や筆者の工夫について考えていくことにした。

〈第3次 内容や筆者の工夫を読み取ろう〉

#### (1) 第1段落

「なぜ手で食べるのか考えよう。」「筆者の工夫を見つけよう。」という学習課題で、1段落について学習した。その中で、筆者が冒頭の部分で、自分の体験から感じた驚きや疑問を述べることによって、読者の興味を引きつけていることや、1段落の中でも初め（問い）、中（食べ方の違う理由を説明）、終わり（まとめ）と段落構成を考えて書いていることなどに気づかせることができた。

全体的にも初め・中・終わりと分けてあるけど、1段落の中でも、初め・中・終わりと分けてあります。また、興味を持たせて、読者をわくわくさせるということは、すごいと思います。インドの人たちは「食べ物にさわった時の感覚もいっしょに楽しんでいる」と書いているので、他の物（目など）でも楽しんでいることも書けば、くわしくなるのでは？と思いました。

#### (2) 第2段落

「なぜはしで食べるのか考えよう。」「筆者の工夫を見つけよう。」という学習課題を設けて、2段落につ

いて学習した。その中で、箸の歴史とともに、韓国、中国の箸の特徴や、モンゴルの箸と比べながら日本の箸の特徴を説明していることを読み取らせた。また、韓国や中国の箸の実物を見せたり、図鑑でモンゴルの人たちの食生活を紹介したりした。

今日の筆者の工夫。文章には書いていないけれど、筆者さんは（自分の伝えたいことから）決してずれないように、お話の中心を決めているんだと思います。それが「手で食べる、はしで食べる」ということなんだと思います。

今日の自分が思ったこと。私達は、三才ぐらいになって初めてはしを持って、お母さん、お父さんに初めてはしの持ち方を教えてもらって、当たり前のようにはしで食べていたけど、本当は、はしは代々受けつがれてきた大切なものなんだと思いました。中国は一つだけ。だけど、中国は、おはしのお母さんでありお父さんであるんだなと思いました。中国という国がなかったら、きっとおはしがなかったと思います。

第2段落の学習を終えた後に、国際コミュニケーション科の学習で、中国、ミャンマー、カンボジア、ラオス、ウズベキスタンからの留学生に来ていただいて交流した。その中で、手で食べる理由や手で食べる時のマナー、現在では食べる物によって道具を使い分けていることなどを、実演を交えながら教えていただいた。また、インディカ米とジャポニカ米を炊いて、実際に手で食べたり箸で食べたり、おにぎりを作ったりする活動を経験させた。

### (3) 第3段落

「筆者の伝えたいことを読み取ろう。」「筆者の工夫を見つけよう。」という学習課題で、第3段落の内容や筆者の工夫について学習したところ、子どもたちから次のような意見が出された。

- ・どんな食べ方でも、ちがうことはおかしくない。
- ・文化にわざと「 」をつけて、注目させるようにしている。
- ・その国の食べ方や生活の仕方が文化だ。
- ・この段落はまとめということがわかる。
- ・「文化」の前の文と次の文を分かりやすく言ったのが形式段落⑯だ。
- ・⑯はこの文章で筆者が一番言いたいことだ。

子どもたちの発言を受けて、筆者の伝えたいことを、確認した後、3段落構成の簡単な説明文を書いてみることによって、「文化」という言葉の意味を考えさせるようにした。

### 日本が主にはしを使う理由

これは、三千年以上前のお話です。

なぜ日本人は、手で食べずはしで食べるのでしょうか。手がよごれても、手を洗うだけでいいんじゃないんでしょうか。

なぜはしで食べるかという、日本の米がもちり手にくっつきやすいからです。手をあらったら、お米がもったいない。でも、いちいち食べるのもぎょうぎが悪いです。そこで、はしです。はしだと、手がよごれずにすみます。本当は、はしはスプーンとセットで中国から来ましたが、茶わんをじかに口をつけてスープなどを飲むようになったし、お茶わんを持ち上げてはしでつまんで口に入れるようになりました。そして、最終的には、はしだけになりました。

このように、代々受けつがれてきた大切なはしは、今でも人々が手に持ってお飯を食べているのです。

子どもたちは、教科書で学んだ内容や留学生から教えてもらったことを生かして、その国の食べ方や生活の仕方などの文化と、どのような方法で食べるかという文化から生まれた人々の知恵を結びつけながらまとめていた。

### 〈第4次 文化のちがいを調べて発表しよう〉

説明文の学習で学んだことを生かして、グループごとにテーマを決め、自分たちが調べた国の食文化について発表原稿を作り、ポスターにまとめて発表できるようにした。その際、グループ内で分担を決め、一人ひとりが主体的に学習に取り組めるようにするとともに、グループでの交流を取り入れて、調べたいことを明確にさせ、より効果的なまとめ方を工夫させるようにした。

### 〈第5次 発表会をしよう〉

国際コミュニケーション科でお世話になった留学生に来ていただき、発表会を行う予定である。

### (3) 学習を振り返って

今回の実践では、単元の中で、自分たちの食文化と比べながら、留学生との交流や関連資料の読み取りを位置付けた。そのことによって、教材文に書かれている内容を再度吟味させ、筆者の主張についてより深く考えさせることができた。また、教材文の筆者の工夫を、調べ学習の発表原稿をまとめる際に活用させることができた。

今後もさまざまな言語活動を関連づけて、豊かな表現力を磨くことのできる協同的な学びを創り出してい

きたい。

#### 4. 実践2－6年「メディアを学ぶ」

ニュース番組を読み解こうー 学校図書6年下

##### (1) 授業の構想

###### ①単元について

世の中には多くのメディアがあふれ、メディアを通じて、日々、多くの情報、さまざまな他者の言葉がやりとりされている。特に報道メディアには、事実を客観的に見つけ、制限された枠組みの中で情報を効果的に伝えていく使命がある。本単元では、ニュースを題材として扱い、ニュースを読み解くことによって、メディアの特性や効果的な情報伝達の手法を理解することとともに、発信者の意図を込めた情報発信について学習していくこととした。また、ニュースを読み解いていく過程では、情報を受ける側の判断の大切さについて学習することにも留意した。

指導の際には、実際にニュース番組を分析することを通して番組構成をつかみ、その伝達手段としての特徴や工夫を学ぶことができるようにした。また、単元の後半では、ニュースの報道を想定した原稿を作成することによって、情報発信の工夫を体験的に理解していくとともに、情報の担い手と受け取り手の意識についても学習していくようにした。自分たちの作成した原稿を比べ合う活動を通して、情報の加工の仕方や、そのことによる受け手の印象の違いについても学ぶことのできる機会とした。たくさんの他者の言葉が、私たちに多くのことを伝えようとしている中で、情報を発信する側の意図を汲み取り、自分の考えで情報を判断し、選択しながら生活していくことの大切さをとらえさせるようにした。

###### ②目標

- さまざまなメディアに興味を持ち、自分の感じ取った感想を表現することができるようにする。
- わかりやすい表現を工夫して話したり、相手の意図をつかみながら聞いたりすることができるようにする。
- 発信者の意図をとらえながら情報を受け取り、それに対する自分の考えを持つことができるようにする。
- グループで協力して学習を進めたり、メディアへの理解を深めながら、お互いの考えを認め合ったりすることができるようにする。

###### ③学習計画(全8時間)

- 第1次 ニュースについて考えよう… 1時間
- 第2次 ニュースを読み解こう…………… 6時間
  - ・ニュース番組から学ぼう…………… 2時間
  - ・ニュースを伝えよう…………… 4時間
- 第3次 ニュースを伝え合おう…………… 1時間

## (2) 授業の実際

### 〈第1次 ニュースについて考えよう〉

本単元の学習を始めるにあたって、まず「メディアとは何なのか」を考えさせた。そして教材文を読み、教材文でのメディアの定義や、メディアが伝えようとする情報は、さまざまな制約を受けるためにさまざまなできあがり方になることや、メディアがもたらす情報は、内容を選択したり編集したり加工したりして提供されることなどを確認した。

### 〈第2次 ニュースを読み解こう〉

#### ○ニュース番組から学ぼう

まず、実際に放映されたニュース番組を録画したものを紹介し、ニュースの主な構成をつかむことや用語の解説などを行った。ここでは、テロップや映像などの要素によってニュースが構成されていることをつかみ、番組制作にさまざまな工夫が込められていることを確認していくことができた。

そして、次に同じテーマを扱ったニュース番組を見比べる活動を行い、それぞれの特徴や感じたことを整理し、制作者の意図を考える活動を行っている。ニュース番組は、「オバマ大統領来日」についてトップニュースで扱っているものを選んで紹介した。ニュースに関する予備知識を補うため、また、他メディアとの比較の

意図も込めて、2009年11月13日付の朝日新聞にまとめられた記事を、番組映像を見る前に紹介しておいた。

学習の中で扱ったニュース番組は、11月13日放送の「ニュース7」(NHK)、「NEWS23」(日本テレビ)である。実際にニュース番組を視聴するに当たっては、



①ニュースの内容、②映像、③音声、④テロップの4点に気をつけて視聴するように促し、それぞれの気づきを共通点、違いの観点からニュース番組の工夫を整理させるようにした。

「子どもたちの気づき」

#### 違いについて

- ・1つのニュースの中でも、区切りがはっきりしているものと、話の中でつなげていくものがあった。
- ・どちらもテロップが使っているが、色を使い分けていて、大事なところがわかるようになっていたところがあった。
- ・「ニュース7」はオバマ大統領のことが中心だったが、「NEWS23」は日本とアメリカの関係みたいなものが中心だった。
- ・インタビューをするところが違う。「ニュース7」では街の人へインタビューしてたくさんのお話を聞けたけど、「NEWS23」では1人がいろんな話をしていた。
- ・映像の量が違っていた。
- ・1つめのニュースでは、映像とアナウンサーの話が分けられていたが、2つめでは映像を流しながらアナウンサーが話をしていた。

#### 共通点について

- ・どちらもインタビューが入っている。
- ・くわしい人(解説者)の意見や説明が入っていた。
- ・どちらもオバマ大統領が飛行機から降りてくる映像から始まっていた。
- ・内容が変わるごとにテロップが出ていた。
- ・テロップではその人の言ったことの内容を短くまとめ、必要なところだけが書いてあった。
- ・テロップや映像の後にくわしい説明がされている。

違いについて交流する中で、ニュース番組の放映時間の違いから会談に入った直後のものと、会談が終わった後で話題の内容が違っていることを指摘する子どもも出てきた。また、2つの番組の違いからは、伝える側の意図によって番組の構成が変わること、そして、共通点からはニュース番組に構成の特徴や工夫などが、子どもたちの感想として表されていた。

#### ○ニュースを伝えよう

ニュース番組を見ることから出てきた気づきを生かし、実際に題材を設定してニュース番組作りを体験する活動を行った。

今回は、共通した題材を設定し、学校行事として行われた集会活動をテーマとした。本校の子どもたちに報道する事を意識し、参加できなかった子どもたちに

向けて、運営に携わった6年生の視点からの報道を工夫しながら構成を行っていた。

〈第3次 ニュースを伝え合おう〉

実際に自分たちがニュースの流れを考え、意図を持って制作したニュースを見合い、それぞれの工夫について感想を述べ合う活動を行った。

作成した原稿に従って、デジタルカメラの動画機能を使用して撮影を行った。今までに他の学習で学んだ技術を生かして編集も行った。



#### (3) 学習を振り返って

今回の学習では、自分たちが直面した題材を扱い、学習の中で学んだことを実際に表現する場を設定していく事で、学んだことを自分の活動の中で生かしていくことができた。また、学習の中で、ニュース番組から情報を発信する他者、ともにニュースを制作する学習者や、自分たちのニュースを伝える相手など、多くの他者の存在を意識して学習を進めることができた。

しかしながら、学習面では、他の学習の積み重ねがなければこんなに短時間での実践は難しいことであるし、ニュースとしての完成度に関しても「ニュースごっこ」の域を出ていないものも見られる。

本実践を踏まえ、学習の意図をさらに明確化し、学習者にとって必要感のある活動を設定して行くことの大切さを感じている。教育活動全般を見渡し、より適切な場を設定しながら有効な単元を設定していきたいと考えている。

#### 5. 考察

ここでは、先に挙げた5点の単元構成上の留意点のうち、3点について考察する。

#### (1) 多様な他者の言葉との出会い

子どもたちは、学習の中で、他者の言葉に出会うことによって自分の言葉を豊かにしている。そこで、学習のねらいに合わせて、さまざまな他者の言葉に出会うことができるようにした。

4年生では、単元の中に、留学生との交流や関連資料の読み取りを位置付けることによって、教材文に書かれている内容を再度吟味させ、筆者の主張についてより

深く考えさせることができた。また、教材文の筆者の工夫を調べ学習の発表原稿に活用させることができた。

6年生では、学習活動の中で、多くの他者の存在を意識して学習を進めることができた。

このように、子どもたちを取り巻く現実社会の中の言葉を教材として取り上げることは、授業で学んだことを生活に生かしたり、生活中的言葉を意識化したり、大切にしたりしようとする気持ちにつながると考える。

## (2) コミュニケーションを大事にした協同的な学び

子どもたちは、それぞれの授業において、他者との交流をとおして、自分の考えを広げたり深めたりしている。そこで、一人ひとりに自分の考えを持たせることを大切にするとともに、交流の場では、他者の発言にかかわりながら自分の意見を述べたり、自分の考えを見つめ直したりさせた。

4年生では、自分たちが調べた国の食文化について、ポスターにまとめて発表する際、グループでの交流を取り入れて、調べたいことを明確にさせ、より効果的なまとめ方を工夫させるようにした。

6年生では、グループごとに、実際に自分たちがニュースの流れを考え、ニュースを制作していった。そして、各グループが意図を考えながら制作したニュースを見合うようにした。

このように、授業の中にさまざまな学習形態を仕組むことによって、他者とのコミュニケーションを大事にした協同的な学びを体験させることができた。

## (3) 表現を磨き合う場の設定

子どもたちは、表現することを繰り返し経験することによって、表現力を伸ばすことができる。また、表現することは、他者に自分の思いを伝えるとともに、自分の考えを自分自身に問いかけ確かめ、学習を深めることにつながる。そこで、単元や授業の中にさまざまな表現の場をつくることによって、これまでに培ってきた言葉の力を確かめさせるとともに、よりよい表現の仕方を身に付けさせるようにした。

4年生では、説明文の読み取りで、「文化」という言葉の意味について、3段落構成の簡単な説明文を書いてみることによって、筆者の伝えたいことを具体的に考えさせるようにした。また、教材文の筆者のさまざまな工夫を、調べ学習の発表原稿に生かさせるようにした。

6年生では、学校行事として行われた集会活動をテーマとして、本校の子どもたちに報道する事を意識し、参加できなかった子どもたちに向けて、運営に携わった6年生の視点からの報道を工夫しながら構成を行っていた。

これらは、新学習指導要領にも示されている「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を追究することのできる国語の能力を身に付ける」ことにも通じる

ものとする。

国語科で扱うことのできる内容には限界があるかもしれない。しかしながら、学習者を取り巻く環境を考慮し、他者を意識した学習を重ねていくことが、教育活動全体、さらには実生活の場面とかわりながら「言葉の世界をひらく」ことにつながっていくものと考えている。そのためにも、さらに多様な実践を積み重ねていきたい。

## 6. おわりに

「実生活で生きて働く国語の能力」の育成や「児童主体の言語活動」の推進は附属三原学園にとって決して新しい課題というわけではない。かねてより「協同」「創造」ということを鍵にした実践を展開してきたわけであり、「新指導要領」に応じていくということは、そうしたこれまでの営みを振り返りながらいっそうの充実を図ることを意味している。

単元「くらしを見つめて」(4年)も単元「メディアを学ぶ」(6年)も、それぞれ「実生活」における「言語活動」に焦点を当てた実践であった。生活場面から切り離された知識(knowledge out of context)の習得に向かうのではなく、さまざまな生活上のコンテキストで生きて働く知識(knowledge in action)に向かうことを目指した。その営みが、友だちと一共に一考えることを可能にする場のなかで実践されていったことに大きな意義があったと言ってよい。

前項でまとめたように、「くらしを見つめて」では食を焦点にした異文化理解を含み込みながら、「メディアを学ぶ」ではメディアの様式とその働きを学びながら、いずれも子どもたちはさまざまな「他者の言葉」と出会い、未知と既知とのあわいに立ちながら、新たな発見を手に入れたと思われる。そのような発見こそが、まさしく「生きて働く知識」を生むのである。

協同的な学びのなかで「生きて働く知識」を生み出すことの方角性を堅持しながら、学習者の言葉を育てていくということがさらに必要である。そして、協同的な学びであるからこそ、学びの課題の内、各自が求める部分と共有する部分とかわりを探っていく必要があるだろう。そうすることが、「言語活動」の充実を図りながら「生きて働く国語の能力」を育てるために重要なことであり、それは新学習指導要領に向かうためにも大切なことである。

## 引用(参考)文献

- 1) 松山雅子編著『自己認識としてのメディアリテラシー』教育出版, 2005年.
- 2) Applebee, Arthur N., *Curriculum as Conversation*, University of Chicago Press, 1996.